

市では、市内の学校に通う児童・生徒に小諸のことをより知ってもらうため、副読本として「こもろヒストリー」を作製しました。ここでは、その一部を連載してお伝えしていきます。



▶江戸で発行された種痘の本



▶康哉をたたえる石碑



▶飢饉に備えて作物を保管した郷倉(ごうぐら) 与良町に残っている

HISTORY No.4

名高い殿様

牧野康哉

まきの やすとし

^{てんねんとう}天然痘という病気は、世界中でたくさんの人の命をうばった。

19世紀近くになって、病気にかからない方法を考えて、その効果を確かめたのはイギリス人の医師ジェンナー。

天然痘にかかった牛の膿を人に移して抵抗力をつける種痘という方法。

種痘を広める

種痘が日本に伝わってくると、小諸藩主の牧野康哉は、藩の医者を江戸に派遣して学ばせた。

種痘を広めて天然痘を防ごうとしたが、人々はその方法に不安を抱き受け入れなかった。

そこで、康哉は、自分の二人の娘に種痘をして人々を納得させた。小諸では約2万4千人が種痘を受けたといわれている。

飢饉の時に人々を助ける

何年にもわたり天候が悪く作物が実らない時、貧しい人々は、草の根や木の皮まで食べたといわれている。

康哉は、飢饉になったときに一番影響を受けるのは老人や小さな子どもたちと知り、小諸藩がためておいた米を分けて与えることにした。

薬用ニンジンの栽培

朝鮮人参、高麗人参は、栄養を補い体力をつける効果があるといわれ、古くから薬として使われていた。

康哉は、この栽培を小諸藩に広めようとした。今も、旧小諸藩の領内だったところで、薬用ニンジンが栽培されている。



小諸学
KOMORO GAKU

超大作

全12回

私が住むまち

小諸の歴史

K O M O R O

H I S T O R Y

歴史の

なかに、

未来の

ひみつが

横た

わっている